

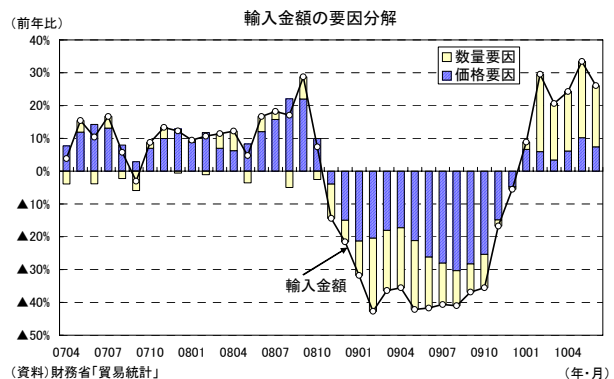
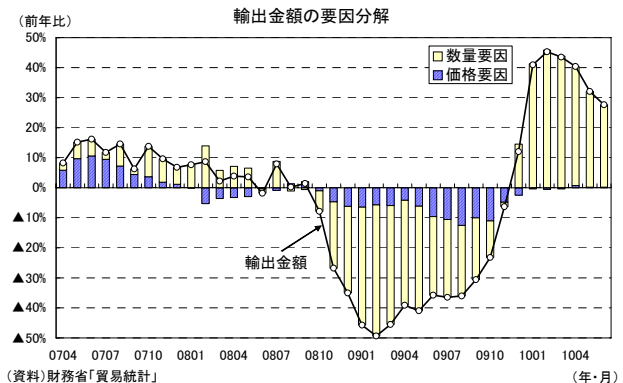
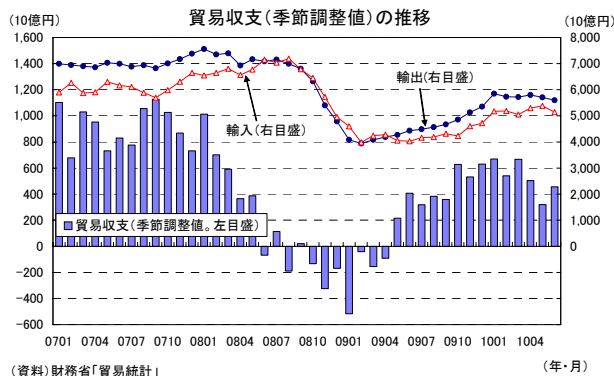
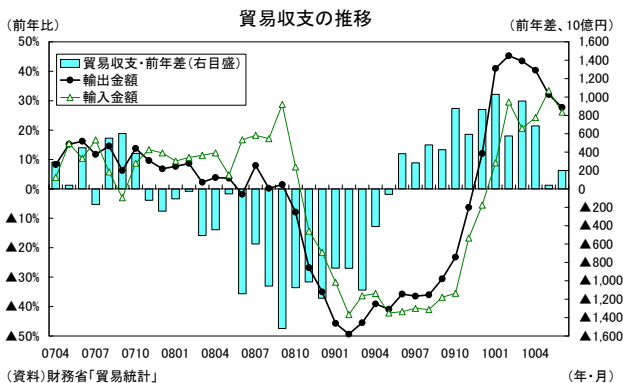
経済・金融 フラッシュ

貿易統計 10年6月 ～4-6月期も外需が成長率を大きく押し上げ

経済調査部門 主任研究員 斎藤 太郎
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 輸出入ともに伸びが鈍化

財務省が7月26日に公表した貿易統計によると、6月の貿易収支は6,870億円の黒字となり、貿易収支は13ヵ月連続で前年よりも改善した。ほぼ事前の市場予想（ロイター集計：7,000億円、当社予想は4,966億円）通りの結果であった。2008年秋のリーマン・ショック以降の急速な落ち込みの反動増の局面が終了しつつあるため、輸出入ともに前年比の伸びは鈍化した。輸出が前年比27.7%（5月：同32.1%）、輸入が前年比26.1%（5月：同33.4%）であった。季節調整済の貿易収支は4,559億円と14ヵ月連続の黒字となり、黒字幅は前月の3,202億円から拡大した。



輸出の内訳を数量、価格に分けてみると、輸出数量が前年比27.4%（5月：同31.9%）、輸出価格が前年比0.2%（5月：同0.2%）であった。輸入の内訳は、輸入数量が前年比18.1%（5月：同

22.2%)、輸入価格が前年比 6.8% (5月:同 9.2%) であった。

2. アジア向け輸出が足踏み

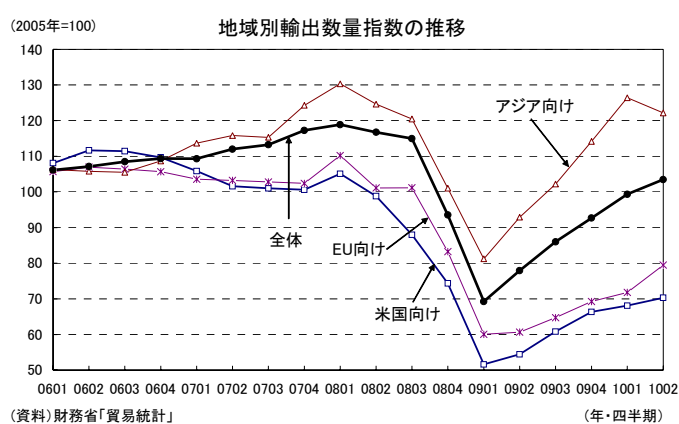
6月の輸出数量指数を地域別に見ると、米国向けが前年比 27.4% (5月:同 20.3%)、EU向けが前年比 27.2% (5月:同 34.7%)、アジア向けが前年比 26.7% (5月:同 28.2%) となった。

4-6月期の輸出数量指数を季節調整値(当研究所による試算値)で見ると、米国向けが前期比 3.3% (1-3月期:同 2.6%)、EU向けが前期比 10.7% (1-3月期:同 3.7%)、アジア向けが前期比▲3.4% (1-3月期:同 10.7%)、全体では前期比 4.2% (1-3月期:同 7.2%) となった。

アジア向けは09年4-6月期以降、4四半期連続で前期比二桁の高い伸びを続けてきたが、10年4-6月期は5四半期ぶりにマイナスとなった。ただし、中国でストライキによって一部の工場が操業停止となっていた影響も考えられるため、基調としてアジア向けの輸出が腰折れしてしまっただと考えるのは早計だろう。

一方、欧州危機、ユーロ安の影響から落ち込みが懸念されていたEU向けは4-6月期にはむしろ伸びが大きく加速し、輸出全体を下支えする形となった。

4-6月期の輸入数量指数(季節調整値)は前期比 2.5% (1-3月期:同 6.4%) と4四半期連続で上昇した。国内需要の持ち直しを背景に輸入は底堅い推移が続いている。



3. 4-6月期の外需寄与度は前期比 0.8%程度プラスに

6月までの貿易統計と5月までの国際収支統計の結果を踏まえて、4-6月期の実質GDPベースの財貨・サービスの輸出入を試算すると、輸出は前期比 7%台と5四半期連続で増加し、1-3月期の同 6.9%を若干上回る伸びとなることが見込まれる。一方、輸入は前期比 2%台と4四半期連続で増加するが(1-3月期:同 2.3%)、輸出の伸びを大きく下回ることになろう。この結果、4-6月期の外需寄与度は前期比 0.8%程度(年率 3%台)となることが予想される(1-3月期の外需寄与度は前期比 0.7%、年率 2.7%)。

当研究所では7/30に発表される鉱工業生産、家計調査等の結果を受けて、同日のweeklyエコノミストレーダーで4-6月期の実質GDP成長率の予測を公表する予定である。国内需要は、政策効果一巡に伴う民間消費の弱含みを主因として、1-3月期の前期比 0.6%から伸びが大きく鈍化する可能性が高いが、外需が引き続き成長率を大きく押し上げるため、現時点では前期比年率 3%台の成長率を見込んでいる。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。